
A new adventure and bonds

夕陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A new adventure and bonds

【Nコード】

N8579X

【作者名】

夕陽

【あらすじ】

あの、藍染たちとの戦いから約50年。

死神にとっては短く。人間にとっては長い時間がたった。

現世組は皆、尸魂界へ。そして、尸魂界にある、瀟靈廷では一護を死神に引き込もうとする運動が…

一護をはじめとする、石田、井上、茶渡。そして、遊子、夏梨。

たつきに啓吾、水色を取り巻く死神ストーリーが今、始まる！

同窓会？（前書き）

初めて投稿します。夕陽です。宜しく願います。

同窓会？

新たな冒険

新たな絆

*

*

*

*

あの、だれもが震え上がった、藍染との戦いから約50年。

死神にとっては短い時間。人間にとっては長い時間。

そのため、現世組の死神代行 黒崎一護、滅却師クインシーの石田雨竜、人間いしだうりゅうのだが、一護といることで才能を開花させた、井上織姫いのうえおりひめ、泰虎すしこ、茶渡

そして、一護が、藍染と戦っている時、目が覚め霊力があると分かった、有沢竜貴ありさわたつき、浅野啓吾あさのけいご、小島水色こじまみずいろ。

あと、黒崎家の遊子に夏梨の9人はもちろん死んだ。

ちなみにもともと死神だった一心は、一番最後に死んだ夏梨に付き添い戸魂界ソウルソサエティに、一緒に行った。

夏梨を抜いた残りの8人は、「死んだら戸魂界に行く」ということを知っていたので無事に戸魂界にたどり着きそれぞれ流魂街に振り分けられた。

一護、遊子、そして水色は西流魂街1地区「潤林安」。

石田、チャド、井上は南流魂街78地区「戌吊」イヌツリ。残りのたつき（

これからは「たつき」と書く）、啓吾、夏梨、一心は北流魂街80地区「更木^{ザラキ}」に。

みんなばらだがある程度固まってる。

南流魂街78地区に送られた、石田達。そして最も治安が悪いとされている北流魂街に振り分けられた、夏梨たち。

振り分けられた所はばらであるが、皆それぞれどこにいるのかはわかっていた。

（簡単に言えば、最後に死んだ夏梨とともに尸魂界に行き、偶然同じところに振り分けられた一心は、縛道の77天挺空羅^{てんていくわ}でみんなに呼びかけた、ため。）

そこである日みんなは一護のいる西流魂街1地区に集まった。

*

*

*

*

「よう。みんなは久しぶり」

「ひさしぶりー。黒崎君！」

「いっちょー！！会いたかったよ。」

「おーす。啓吾ーお前変わってないな。」

「一護！うで、うで！息が…。」

「おーわりーな啓吾」

「大丈夫ですか？浅野さん。」

「えっなに？なぜに水色、敬gブギヤっ！！。」

「うるさい。もーだまれ！」

「わーあ。たつきちゃん。死んじゃうよー。」

「何言ってんの織姫。もう私たち死んでるのよ！」

「アーそうだった。」

「いち兄！遊子！」

「夏梨ちゃん！お父さん！」

「いちご。ゆず。あいたかったぞー。」

「キモイ！もうこれ以上しゃべるな！」

「ナイス！夏梨！」

「ム。」

「あー。君たち久しぶりの再会のところ悪いんだが、少し黙ってくれないか？」

「……。」

「わりー。石田。」

「分かればいい。」

「ンじゃ。えーと……。」

「……まさかと思うが黒崎。何の用もなしに僕たちをここへ招いたのか？」

石田が、……ここまで来るの結構大変なんだぞ、……とつぶやき、――護に怨むような視線をぶつけた。

「……。途中で切るな！そんなわけねーよ。」

「えー。ゴホン。ンじゃみんなにいくつか質問するぞ。」

「まず、一つ。みんなはいつごろ死んだ？」

「はいはい。」

井上が手を挙げた。

「ンじゃ井上」

「ゴホン。私は、35歳の時に病気で死んじゃったんだ……。」

「確かそんぐらいの時、織姫、ガンで倒れたね……。」

「そうか。じゃ次。たつき。」

「えっ。あたし。あたしは交通事故。」

「何歳ぐらい？」

「うーん。3……7、8歳かな？」

「そうか。次は……啓吾」

「おれっ。俺も交通事故つか、有沢が死んだ交通事故と同じなんだ

よー。」

「えっうそ！そーいえばあれ3台いつきに事故ったんだっけ。…
てことはあんた…、信号無視したほう？」

たつきは、不敵な笑みを啓吾に向けた。

「へっ…ち、ちがうよ！それもう1台のほう。」

「ほんとーお？」

「ほんと！ほんとにほんとですから！」

「…あっそう。」

「ふ〜。」

（苦労してるな。啓吾）

一護は心の中でこっそり思った。

「…じゃ次。水色。」

「ん。僕は、27歳ぐらいに海に行つて、溺死。」

「むごいな」

夏梨がつぶやいた。

「ははっ…。じゃ次、石田」

「ン。僕か。僕はな。やっぱやめた。」

「…おい。やめんなよ。」「」

一護、啓吾そしてたつきが突っ込んだ。

「いやー。」

「ごまかすな。」

「厳しいな黒崎。」

「厳しくない。第一みんな答えてるんだから、お前も答えろ。」

「…。」

「あつ。もしかしてすんごく恥ずかしい死に方だったりして。」

夏梨が言った。

「…。」

石田は顔には出していないが、内心めちゃくちゃ焦っていた。

（なんでわかつたんだ。）

「図星か。」

「…。そういう黒崎は、どうして死んだんだ？」

「俺か。俺はっ、ていうか俺たちは、親父が車を運転してる時に、相手の車が突っ込んできた。交通事故。その事故で死んだのが、俺と遊子。」

「そうか。でも君が死んだらすぐに朽木さんとか阿散井君とか来るんじゃないか？」

「もちろん来たぜ。まあ。来たって言っても俺たちが流魂街に振り分けられる場所にな。」

「何故だ。君がきたなら即刻死神にすればいいものを。」

「ああ。ルキアがすぐにでも俺を死神にしようとしてたな。」

「じゃあなんで。」

「俺が断ったんだ。俺が死んだのは、大学生、最後の夏。遊子は大學生の夏だ。もちろんまだ誰も死んでないから知り合いは誰もいない。だからみんなが来るのを待ってたんだよ。なあ。遊子。」

「うん。」

「そうかまあ分かった。ところでなぜ夏梨ちゃんは何故死んだんだ？見た目はずいぶん若いが。」

「あー。私が死んだのは一兄たちが死んだ10年後。つまりあたしの年は30歳。o , k ? ンで、死因は、ひかれそうになっていた親子を助けて死んだ。」

「ああ。そうか。一つだけ聞いていいかい？」

「うん。」

夏梨が答えた。

「後悔してないか？」

「もち！」

夏梨は飛び切りの笑顔で答えた。

「そうかい。」

石田は安心したような声を出した。

「おーい。もういーかい。」

一護が少し大きめの声を出した。

「ああ。もちろん。」

石田は答えた。

「ンじゃ最後にチャド。」

「ム。俺は、……。上から鉄骨が降ってきて死んだ。」

「ン？前にもこんなことなかったか？。」

一護が水色に聞いた。

「あー。うん、あったね。」

「だよな」

「うん」

「…。ちよつと二人とも何話してるの？ねえなに？なんなのー？」

「なんですか。浅野さん。」

「はっ。水色が敬gブギヤ」

「だ・ま・れ」

たつきが、啓吾の腹を踏んだ。

（あははは。さつきもあつたなこの光景。）

井上は内心苦笑した。

「は…い」

啓吾はのどから搾りだいたような声を出した。

「ねーインコの兄ちゃん。」

夏梨がチャドに聞いた。

「インコの兄ちゃんじゃない。茶渡泰虎だ。」

「あっそう。まあそれは置いといて。…。さつき自分の死に方のこと話してるとき細かいことハシヨツただろ。」

「ム。」

（やっと気づいたか）

チャドは思った。

「ム。じゃなくて！ちゃんと答えなよ！えーとなんだっけ。さ、」

「違っぞ夏梨！茶渡兄じゃなく、チャド兄だ！。」

一心がここぞとばかり胸を張って夏梨に言った。

「だまれ親父。」

夏梨が睨んだ。

「はい。」

「んじゃ。チャド兄はどうして死んだの？」

夏梨が改めて聞いた。

「ム。俺は、ビル建設現場の道をとってたら、ベビーカーを押しながら歩いてる婦人の上に鉄骨が降ってきた。それを俺はかばって死んだ」

「ふーん。あたしと同じじゃん。」

「でもよーチャドー。お前高校のときは、上から鉄骨が降ってきても生きてたじゃん。」

一護が聞いた。

「打ち所が悪かったようだ。」

「…。そうか。」

同窓会？（後書き）

初めて投稿します。夕陽です。宜しくお願いします。
誤文字などの指摘がありましたら報告お願いします。
感想お待ちしております。

死神にならないか？（前書き）

第2話、どうぞ！。

死神にならないか？

私たちの運命は

もう一度交わることができるのだろうか？

*

*

*

*

尸魂界。

十三番隊隊舎。

「その話は本当ですか。浮竹隊長！。」
「本当だ。」

ルキアは浮竹の答えを聞き、驚いたような表情をしていた。

「そうですか。私が…。」

「いやなら行かなくていいんだぞ。」

「…。いや。行きます。やはりこのことは私が適任だと思いますので。」

「ああ。先生もそうおっしゃっていた。でも一人で行くのか？。」

「ええ。そうですね。でもそうしたら誰を誘おうか…。」

「ああ。そうだな。3番隊の阿散井君なんてどうだ。」

「ええ。それは私も考えたのですが。恋次は、何せ隊長の身ですので。仕事が忙しいかなーと。」

「ああそうか。じゃあ…。そうだな日番谷隊長とかは？特に一護君の妹の夏梨ちゃんだっけ？。」

「はい。」

「喜びそうじゃない。」

「ええ。でも日番谷隊長はちょっと今は、手が離せないそうなので。」

「…。そうか。じゃあやっぱし一人で行くのか?。」

「はい!。」

ルキアは気合が入った声で答えた。

「そうか。まあそんなに難しくはないだろう。もう少ししたらあっちから来そうだけだな。」

「そうですね。」

ルキアは苦笑した。

「それじゃ。行つてきます。」

「おう。」

ルキアは瞬歩で、その場から消えた。

「楽しみかなあ。朽木は。」

浮竹は、ふふつと微笑みながらつぶやいた。

「さあ!今日もしごと。」
ばた。

「キヤー! 浮竹隊長大丈夫ですか?!」

近くで隊長のことを見ていた清音が叫んだ。

(ああ。今日も布団かな。)

浮竹は他人事のように思っていた。

*

*

*

*

西流魂街1地区

「…。結局みんな寿命で死んだんじゃないんだね。」

遊子が言った。

「そうだな。まあそうじゃなきゃみんなこんなに若いわけないしな。」

「一護が苦笑しながら言った。

「ところで黒崎。ほかに僕たちに質問はないのかい？」

「…。」

「お兄ちゃん？。」

「ン。あーあるぜ。もう行っちゃえばぶっちゃけこれ最後の質問だぜ。」

「……………（ゴク）……………」

一護以外のみんながつばを飲み込んだ。

「みんな……。死神になる気はないか？」

「えっ。」

声を出したのは…夏梨だ。

「それ本気？一兄。」

「本気だぜ。」

「みんな多少は霊力があるだろ。」

「うん。まあ。」

答えたのはたつきだ。

「だから誘ってんだ。死神にならないかって。」

「……………。」

みんなは黙りこくった。まあ当然だな。一護はそう思った。

「それほんと！一兄！！」

ゆうついっ夏梨だけが目を輝かせ一護に聞いた。そんな夏梨の態度に驚いたのか、一護は一瞬言葉を失った。

「ああ。まあな。」

「あたし絶対なるよ一兄！。」

「そ、そうか。」

「みんなは？。」

夏梨は生き生きとしてさつきから黙っているみんなに聞いた。

「私はなってもいいよ。」

井上だ。ひじを曲げる程度に手を挙げながら言った。

「あたしもなつていいよ！ていうか、私はバリバリなる気満々だったけどな。」

たつきが意気揚揚に答えた。

「はい俺も俺も。」

「僕も。」

「ム。俺も。」

「わ、私も。」

上から啓吾、水色、チャド、遊子の順だ。

「そうか。」

一護は内心胸をなでおろした。みんなの反応は少し予想外だったからだ。

「残りは…石田だけだな。」

みんなは石田を見た。石田はうつむいていた。
が、急に顔をあげた。

「はあ。君たちなんだい。人の顔をじろじろ見て。僕の顔に何かついてるのか？。」

「ン。いやお前はどうか…。死神になるかどうか。」

「僕は、滅却師だ。^{クインシー}でもまあいい。いいよ暇だから。死神になってあげても。」

（めちゃくちゃ上から目線だ）

一護たちは心の中で思った。

「そうか。じゃみんなで死神になるぞー。」

「何そのやる気のない声は。」

たつきが言った。

「ねえ黒崎君。死神になるには、死神の学校に行かなくちゃいけないんじゃないの？。」

井上が一護に聞いた。

「えっそうなの？。」

啓吾も、一護に問いかけた。

「ああ。そうだ。」

「えっじゃあ、試験とかはあるの。」

「…。じゃあ、それはそこにいる人に説明してもらおうか。」

「護は家の裏を指しながら言った。」

「へっ。そこに誰がいるの?。」

井上が変な声を上げた。

(馬鹿な。一護に私の霊圧がわかるはずが…。)

「いいから出てきなよ。」

「護が呆れていった。」

「出てこないなら迎えに行くよ。ただしあと10秒たったら。」

「10…。9…。」

(どうする出ていくか?。)

「8…。7…。6…。」

(どうする。)

「5…。4…。3…。」

(あーも考えてもらちが明かない。)

「2…。いち。ゼロ。」

シュン。

「ふー。やっと出てきたか。」

今でてきた人物を見てみんなの顔が驚きやら嬉しいやら。

「護は今出てきた人物に話しかけた。

「……。久しぶりだな……。ルキア。」

死神にならないか？（後書き）

どうでしたか？ついにルキア登場です！

誤文字のご指摘、感想お待ちしております。

静霊廷へ（前書き）

ルキア登場しました！ちなみにルキアは13番隊副隊長です。

それでは、第3話スタート！

静霊廷へ

あなたの思い

私の考え

*

*

*

*

「く、朽木さん…。」

「朽木…。」

「朽木さん。」

「朽木さん。」

「ルキ姉。」

「ルキアちゃん。」

「…。」

「朽木さん…。」

「ル、ルキアちゃん!?!?。」

上から、井上、チャド、石田、たつき、夏梨、遊子、一心、水色、
啓吾だ。

「…。」

ルキアは黙って、一護のほうを向いた。

「ン。なんだルキア?。」

ドシ ドシ ドシ ドシ

ルキアがすごい足音を立てながら一護のほうへ近づいた。
「何が…。久しぶり…。だ。」

「へっ!。」

一護は驚いて変な声を上げた。

バン!

「っ!。何すんだよ、ルキア!痛いじゃないか!。」

「当たり前だ!痛いように殴ったんだからな!。」

ルキアはまた一護を殴った。

「……………」

みんな目の前の光景に啞然とした。

「ちょっと朽木さん!やめなつて!。」

再び、ルキアが、一護のことを殴った時の音で我に帰った井上が、急いで止めた。

「と、止めるな!井上!!あと一発。あと一発、殴らなければ私の気が収まらない!!。」

そう言いながらルキアは、自分の拳に、「ハア!。」と息をかけた。「なんで朽木さん、出てきてそうそう、黒崎君を殴ってんの?。」

「…。あの、一護に私の存在がばれたからだ。」

「おい!ルキア今、俺のことを「あの」って言っただろ!どういう意味だそれ!。」

「フン。そのまんまの意味だ。それ以外にないがある。」

「なんだと!俺より弱いくせに。」

「貴様こそなんだ。さっきから偉そうに!お前はそんなに偉いのか?もう死神代行ではなかるうに!!!。」

「だまれ!お前こそ、そんなに偉くなったのか?。」

「フン。」

ルキアはそう言いながら自分の左腕についている、副官掌を見せた。「どうだ!。」

「昇進したのか…。」

石田がつぶやいた。

「ああ。さすがに50年もたつとな。」

「お前その割には、ちつとも成長してねえじゃないか！外見が。」

一護が今思ったことを口にした。

「五月蠅い！たわけが！」

ルキアは、顔を真っ赤にして答えた。

「はいはい。」

慣れたようなやり取りに、一護以外のみんなは、いまだに固まっていた。途中でつぶやいた石田、井上も、再び硬直状態に、戻っていた。

「ルキ姉！！」

一番最初に、硬直を解いたのは、夏梨だ。

「…。なんだ。夏梨か。」

一護が少し驚きつつ、つぶやいた。

（まさか一番最初に、ルキアに声をかけるのが夏梨だとは思わなかった。）

「なんだ。夏梨。」

ルキアが夏梨に問いかけた。

「うん。なんでルキ姉は、ここにいるの？」

（確かにそうだ。なんでルキアがここにいるんだ？）

一護は今の夏梨の問いかけを聞き、思った。

「…。私は、一護たちを迎えにきた。」

「……。へっ？。」

一護がすつとんきような声を上げた。

「…。えっ。なにに。なんでルキアちゃんが一護たちを迎えに来たの?。」

今の、一護の声を聴き、我に返ったのか、啓吾がルキアに聞いた。

「うむ。私は、一護、遊子が死に、尸魂界へ来たとき、一護を死神に引き入れようとした…。というのは知ってるな。」

ルキアは、皆の顔を見渡しながら言った。

当然みんなは、うなずいた。

「それでその時、一護は断った。」

「うん。」

遊子がうなずいた。

「その時の一護の言い分が、『俺たちが死んだのは、皆より早い。だからここに。知り合いがいねえ。まあここにいるやつら、全員そうだけだな…。けど俺は、しばらくは遊子といたい。しかも俺は死神になる気はねえ。遊子を一人にしたくねえから…。また、俺に死神になるようにお前たち死神が、言いに来るなら、おれの知り合いが全員死んだとき、もう一度来てくれ…。その時まで、答えは用意しとく。』」

…。だから約束どうりに、私は迎えに来たのだ!。」

「そうだったんだ…。」

井上がつぶやいた。

「…。黒崎。お前、そんなこと言ってたのか。」

石田が一護に聞いた。

(…。俺、そんなこと言ったか?)

一護は心の中で自分に問いかけていた。

一護は真剣に、今ルキアに聞かれたことを、考えていた。

「…。い…。お…。黒崎!おい。黒崎!。」

考えにふっけていたのか。一護は石田の声を聞き取るのに時間が

かった。

「ン。なんだ、石田。人の耳元で。」

「君が僕の質問を無視したからだ。」

「んだよ。そんなぐらいで。てか、お前いつ俺に質問した?。」

「さっきださっき!もう一度言ってやろうか?。」

「ああ。頼む。」

「…。お前、そんなこと言ったのか?。」

「そんなこと?。」

「さっき朽木さんが言ってたことだ。」

(さっき?ああ。あのことが。)

「うん。言っただぜ。」

「そうか。」

「それで。」

「それでって?。」

たつき、に声をかけられ、ふりかえりながら一護は答えた。

「だから、あんたが死神になることについて。」

「ああ。それか。なるぜ死神に。お前らもなるんだろ?。」

「なれるなら、なりたいけど。でも一護は、もともと死神代行だから、学校に行かなくてもいいんじゃないの?。」

たつきが聞いた。

「ン?そうかもな。どうなんだルキア。」

「ん。確かにお前なら、学校に行かなくてはいいかもしれないが、お前、鬼道ができないだろう。」

「ああ。」

「だから、多分だが、その点に関しては、学校に行けと言われると思うが…。」

「だ、そうだ。たつき。」

「ふーん。で?。」

瀟靈廷へ（後書き）

どうですか？ついに一護たちは、瀟靈廷へ出発します。

ちなみに、なぜ一護がルキアの存在に気づいたかは、次回でわかります。

一心の出番少ないですね。多分、次回でしばらくは出番がありません。

誤文字のご指摘等の報告、感想、などなどお待ちしております。

瀟靈廷に、出発だ（前書き）

ルキアたちは、ついに瀟靈廷へ出発です。

4 話目スタート！

瀟靈廷に、出発だ

旅立つときは 仲間とともに

新たな場所に 足を踏み入れる

*

*

*

*

「「「「「「「「「「瀟靈廷?!」「」「」「」「」「」

これからどこに行くのかを、ルキアに聞き、帰ってきた答えが、皆を驚かせた。

「うるさい!そんなに驚かなくていいものを。」

「おいおい。ルキア。なんでいきなり瀟靈廷なんだよ?。」

「ほかに行ける場所があるとでもいうのか?。」

ルキアは一護の問いに、逆に聞いた。

「そりゃ。お前。俺たちが、行けるところの二つや、三つ...。」

「いや。ないぞ黒崎。そんなところは。」

石田が、きっぱりと言った。

「そんなきっぱり言うなよ...。」

「ほーらな、一護。」

「...。」

「あつそつだ。黒崎元隊長。」

「ん。なんだ?。」

今まで出番が少なすぎ、隅っこで落ち込んでた、一心が、顔を挙げた。

「『『え　　！』』」

遊子、夏梨、一護、の3人は、驚いてものすごい、声を上げた。

「お、親父。隊長だったのか?。」

「おう。あれ言ってなかったか?。」

「ああ。」

「そうか。俺は、7番隊元隊長だ。」

「『『『『『『『ええ

！』』』』』」

「『『

ここにいて、皆が驚愕した声を上げた。

「貴様ら。うるさいぞ!。」

「『『『『『『『はい。』』』』』」

(なんかこんなやり取りさつきもあつたような…。)

石田は心の中で思った。

「黒崎元隊長。」

「なんだ。」

「ちよつと…。」

と、言いながらルキアは、手で招くようなしぐさをした。

「ん?。」

「耳を。」

「……………」

「…。それはほんとか?ルキアちゃん。」

「はい。……。あとそのルキアちゃんというのは止めてほしいのですが…。」

「えつ。なんで?。」

「そんなの決まってるだろ。」

今のルキアの声を聴き、夏梨が話に割り込んできた。

「お前にそう呼ばれるのが、キモイからだよひげ。」

（おいおい。夏梨。お前、親父に対しての態度は変わらないんだな…。）
一護は、思った。

「うつそ　ん！」

「とてもいいらしいのですが…。その通りです。」

「ガビン。ひどいよー。ルキ「いいから。黒崎元隊長、早く行ってください！」」

「はい。」

一心は、瞬歩でその場から消えた。

「おい。ルキア。親父はどこに行ったんだ？」

「一護は、まだ知らなくていい。」

「はあ？それ、どういう「さあ、早く、瀨霊廷に行くぞ。」

「おい。ルキア。無視すんな！」

「だまれ！行くぞ！」

「行くのはいいけど。朽木さん。どうやって行くのさ。」

石田が、さつきから疑問だったことをルキアにぶつけた。

「それは、これだ！」

ルキアはそう言いながら、馬を指さした。

「「「「「「「「「「馬あ？」「」「」「」「」」

「ああ。」

「てっ、まさかと思うけど、馬に乗ってトコトコ瀨霊廷に行く…とかいうんじゃないよね、ルキ姉？。」

夏梨が、疑いの目でルキアを見た。

「そんなわけなかるう。この馬は少し特殊でな。技術開発局に、頼んで特別に作ってもらったんだ。」
ルキアが自慢そうに言った。

「そこお前が自慢するところじゃねえだろ。」

一護が、突っ込んだ。

「五月蠅い！黙って聞け！」

「はい。」

「で何が特殊なの。その馬。」

夏梨が、脱線した話を元に戻した。

「よく聞いた。この馬は、霊力があるやつでしか乗れないんだ。しかも、もともと死神だった者は、死神の姿に戻る。」

「えっ。それって。つまり…。」

井上がつぶやいた。

「その馬に乗れば、黒崎は…。」

石田が井上の跡を継いだ。

「「「「「「「「「「死神に戻る?!」「「「「「「「「「

「それほんとか！ルキア!!!」

一護がうれしそうな声を上げた。

「ああ。それでは、説明終わりだ。さあみんな、馬へ乗れ！」

「ああ。」

みんな自分の前に来た、馬に、またがった。

「どうだ。一護、死神に戻ったか?。」

ルキアが一護に問いかけた。

「…。まだみた」

いだ。一護は最後まで言えなかった。体が急に光だしたからだ。

「おい！ルキア、どうなってるんだ!?!」

一護が素っ頓狂な声を出した。

「私にもわからん。なんせ、この馬は、だれにも試したことがないからな。」

「く、黒崎…。」

「黒崎君。」

「一護…。」

「…一護。」

「一護。」

「い、一護。」

「お兄ちゃん…。」

上から、夏梨、石田、井上、チャド、啓吾、水色、たつき、遊子の順だ。

「い、一護！その姿…。」

一護は、死神代行時、また死神がいつも着ている、死覇装を着ていて、背中には、一護の斬魄刀。斬月が、あった。

「ん。ああ。なんか、俺、死神に戻ったみたいだな…。」

「…。」戻ったみたいだな。『じゃ、ないわ戯け!!。』

「んだよ、ルキア。なーにが、『戯け!!』だ。もともと、この馬は、俺が死神に戻るための馬だろ?。」

「まあな。」

少し違うが…。ルキアは思った。

「じゃあ俺が、死神にもっとったから良いんじゃないか。」

「そうだな。」

「ねえ。朽木さん。本当に、瀨霊廷に行くの?」

「ああ。」

「じゃあ早く行こうよ。」

「なんでだ?。」

「あついや。あ、のね。なんか私たちが乗っている、馬。機嫌、悪くなったみたいで…。」

「はあ?。」

ルキアは、驚いた。そして井上に促されるままに、井上たちが乗っている、馬を見た。

「ブルルウ。」

ほんとだ。技術開発局に奴ら目。妙なところに、こだわりよつて。ルキアは、こぶしを握りながら、思った。

「まあいい。皆、それでは、これより瀟靈廷に出発だ!。」

静霊廷に、出発だ（後書き）

静霊廷になかなか出発しませ
な？ ん！！次話には、出発できるか

ついに、一心がいなくなりました。（笑）
なんで、一心がいなくなったのかは、秘密です。

今回の話、なんか短いです。すみません。

誤文字の指摘、感想等、お待ちしております。

瀟靈廷への道のり（前書き）

やっと、ルキアたちは、瀟靈廷へ出発です。

5 話目スタート！

瀟靈廷への道のり

仲間とともに
歩みを進め

仲間とともに
強くなれ

*

*

*

*

「おいルキア。俺どうすれば、いいんだ？」

「なにがだ。」

「いやあ。さつき、俺が死神になったとき、なぜかわからないが、馬が消えたんだ。」

「で？」

「いや。だから、俺はどうすれば、いいのかって聞いているんだけど……。」

「そんなもの。瞬歩で来ればよかるつ。」

「いや。そうしたら。馬に乗ってる、こいつらはどうするんだ？ 瞬歩の速さに、ついてこれるのか？」

「当たり前だ。この馬をなんだと、思ってるんだ？」

「……。俺を死神にするための馬。」

「馬鹿者！！そんなわけないだろう。この馬は、少しであるが、死神の力を使えるのだ。ただし、この馬に乗ってる者の、霊圧により、多少の差は出るがな。」

「へえ。そうなの。じゃ、俺は瞬歩で行くわ。」

「ああ。そうしてくれ。すう。」

ルキアは、空気を吸った。

「それでは、皆、瀟靈廷へ行くぞ!!。」

「
「
「
「
「
「
「
「
「
お
お

!!!!

「「「」

*

*

*

*

ところ変わって、瀨霊廷内。 十三番隊隊舎

「来るかなあー？一護君は。」

「来るでしょ。あの一護君なら。」

ルキアが、いなくなつてすぐ倒れた、浮竹は八番隊隊長と話をしていた。

「てゆうかさあ。浮竹、もう起き上がつて大丈夫なの？。」

「ん。ああ、大丈夫、大丈夫。さっきは、目眩がしただけだからね。」

「いや、その目眩、普通の人に、とってはものすんごいだつて……。まったく。こいつは、自分の体の弱さをそんな簡単に言うかねーえ。普通。」

京楽は、思った。

「京楽は、心配性だなあ。」

「いやあ。浮竹が、倒れると僕は、清音ちゃんと小椿君に怒られるからねえ。」

「あははは。そうだな。」

ドタ ドタ ドタ ドタ ドタ

ガラ

急に障子が開いた。

「報告します。朽木ルキア副隊長が、元死神代行、黒崎一護を死神に戻すことに成功。また、本人は死神の学校。真央霊術院しんおうれいじゅついんに、行き

たいと、言ってる模様です。」

小椿が、ルキアからの報告を浮竹に話した。

「ちょっと　　！！それが言おうと思ってたのよ！！勝手に

言わないでくれる？。」

清音が、障子の向こうから、顔を出した。

「そんなの、しらねーよ！大体、地獄蝶が、俺のところに飛んできたんだから、俺が報告するのが、普通だろ！！。」

「あんたの、ところに飛んできたんじゃないくて、たまたま、あんたがいたところに飛んできたんでしょ！！勝手に、自分のところに飛んできたなんて思わないで！！。」

「な、何お　　！！。」

「何よ　　！！私が何か間違えてるとでも言いたいのか？。」

「ああ！そうだよ！」

「じゃあ、言ってみなさいよ！」

「はあ。また始まったよ。」

「始まっちゃったね。」

浮竹、京楽はあきれ顔で言った。

「は～～い！ストップ。」

京楽は、大声をだし、二人を制した。

「……。」

「それで？。」

「それで？つといわれますと。」

小椿が、不思議そうに言った。

「朽木は今、どこにいるの？。」

「はい。それでしたら、今は瀟霊廷に向かっているそうです。」

小椿の横から、清音が口を挟んだ。

「そうか。」

浮竹、ほっとしたような声を上げた。

*

*

*

*

「よしみんな。馬に瞬歩、させるぞ。」

「てっ。黒崎！馬にどうやって瞬歩させるんだ！」

「さあどうやるんだろうな。」

「おい。」

石田が突っ込んだ。

「お　い。ルキ　ア　　！石田達が、どうやって馬に瞬歩させるか聞いてんぞ！」

一護は、家の屋根に乗ってる、ルキアに呼びかけた。

「分かった。ちよつと待ってる。今報告中だ。」

「へーい。」

「まったく、一護は。。。報告します。」

ルキアは地獄蝶に向かって、報告した。

「元死神代行、黒崎一護を死神の姿に戻すことに、成功。また本人は、真央霊術院に行きたいとのことです。報告、終わります。」

*

*

*

*

「馬に、瞬歩させるのは、実はすごく簡単なことだ。馬に乗って『瞬歩したい』と思う、というか、念じるだけだ。」

「ホントー？。」

夏梨が、訝しげに聞いた。
ルキアは、無言で頷いた。

「……………」

みんな、馬を瞬歩させようと、念じた。

その時。

シュン

2〜4匹の馬がいきなり遠くに移動した。
瞬歩した、馬に乗っていたのは、

石田、井上、チャド、そして夏梨だ。

「うむ。石田達は、予想道理じゃな。」
ルキア、一護の後ろで急に声がした。

「よ、夜一さん！」

「夜一殿！」

猫の姿の、夜一が、二人の後ろに座っていた。

「ふむ。夏梨が来るとわな。これは、予想外じゃ。」

「てっ！何でここにいるんすか！夜一さん！」

「なんじゃ。わしが此処にいてはいけないように、聞こえるが。」

「いや。そうは、言っていないけど。」

シュン

また何匹か、瞬歩した。

今度は、水色、たつきだ。

「夏梨ちゃん、どうやってやったの？。」

「念じるだけだよ！遊子！」

「うーん。」

シュン

「わーいできた！」

「やったね遊子！」

パチン！

ふたりは、ハイタッチした。

遊子が瞬歩した。

「おい啓吾！早く来いよ、置いてくぞ！」

「えー。ちょっと待ってよ。…。」

シュン

「やっとできた。」

「お　い。啓吾　お　いて　くぞ　！」

「護たちは、啓吾を置いて、600mぐらい進んだ。」

「え　！　ちよつと、待ってよー護　！」

「早く来いよ…。てっ、夜一さん！なに、何気に俺の方に乗ってるんですか！」

「良いではないか。良いではないか。」

「はい。もういいです。」

*

*

*

＊

「で、ルキア。いつ瀨靈廷につくんだ？」

「もう少しだ。」

「さっきからずっとその答えだぞ！」

「黙ってついてこい。もうすぐだからな。」

「わぁ。」

「どうした井上？」

井上が、急に大声を出した。

「なんか私の馬と、私自身を守るように、オレンジ色の膜が出てきたんだけど…。」

「ほんとだなあ。」

一護はそう言いながら、チョンと、さわっみた。

ジン

この感覚前にもあったような…

一護は井上を守ってる物をさわりながら思った。

何だっけなあ。なんか、井上の、能力だっけなあ。…。

一護はこれが何かを思い出した。

「おい、井上。」

「何？」

「お前のまわりあるオレンジのもの。それ、…。」

「盾舜六花じゃないか？」

「ほえ？。」

「ほえ？じゃなくて。そのオレンジのものは、お前の能力の、盾舜

六花の、三天結盾じゃないかっていつてんだ。」

「たしかに。そういわれるとそうかも。」

井上は、オレンジのものと睨めっこしながら言った。

「だろ。」

「…ああそういえば、言い忘れていたが、」

ルキアが急に口を挟んできた。

「この馬は、乗ってる者の霊圧によっていろいろ変化するらしい。

つまり、斬魄刀の能力と同じ。」

「…。ということは、私の斬魄刀の能力は、盾舜六花ってこと?。」

「そうとも言い切れない。この馬の変化は、乗ってる者の霊圧によって変わるもの…。井上は現世で才能を開花させてるから、単純にその時の名残で、馬の変化が、三天結盾だったということもある。」

「そうなんだあ。」

「なんか僕と、茶渡君も変化してきた。」

「ム。」

「石田の変化ってどんなんだ?。」

一護が石田のほうへ瞬歩した。

「そんなに変化はしてない。しいて言えば、こいつの腹に、クインシークロスが出てきたことか。」

と言いながら、石田は馬の腹を指差した。

「ふーん。チャドは?。」

「ん。」

と言いながらチャドは、馬の腕を指差した。

「おつ。チャドの馬の腕、お前の戦うときの腕になってるじゃん。」

一護は、

まあ、予想はしてたけどな。

とつぶやきながら、瞬歩した。

「うそつけえ。絶対おぬしは予想して、無かつたろう。」

「五月蠅いすつよー。夜一さん。あと予想はしてました!!。」

「ほんとかのー?。」

「護はもう、無視した。」

「あつあの、」

「ン?どうした。遊子。」

「アッ!お兄ちゃん。あのね私の馬もね、変化したの!」

「どう、変化したんだ?。」

「あのね!馬が、全体的に濡れてきたの。これって変化の一部?。」

「どうなんだ?ルキア。」

「ああ。多分遊子は、流水系だな。」

「だってよ、遊子。良かったな!。」

「うん!。」

「ほほー。遊子は流水系か。」

「なんすか夜一さん。いちいち出てきて。」

「なんじゃ。出てきちゃだめなのか?。」

「...。」

「護はまた無視した。」

「ねえ、一兄。あたしも変化したよ!。」

「おつ。夏梨はどう、変化したんだ?。」

「あたしは、なんかこいつらがこつ、電気が流れてるみたいに、ビリツと。」

「ん。夏梨は、鬼道系だな。」

「ふーん。」

「感心なしか。夏梨は...。」

一護は思った。

「流水系に鬼道系。しかも電気ときたか。なかなかいい、組み合わせじゃな。」

また夜一が出てきた。一護は、最初から無視した。

「なんじゃ。つかかってこんのかさみしいの。」

一護はまた無視した。

「なあーちごー。」

「五月蠅いっすよ！夜一さん！！黙っててください！！！」

「はい。」

静霊廷への道のり（後書き）

なんか中途半端なところで終わりましたね。（汗）

今回は、なんとなくみんなの斬魄刀の能力を少し公開です！

残りの、たつき、啓吾、水色は次回で。

そういえば、なぜ一護はルキアが来たのか分かったのか……。書いてなかった…。

次回、絶対書きます！

誤文字の指摘、感想などなど、お待ちしております。

静霊廷に到着！（前書き）

ついに静霊廷です。

6話スタート！！

静霊廷に到着！

新たな力

新たな能力

*

*

*

*

「いいなあ。」

たつきがつぶやいた。

「なんで私はでないのかなあ。変化。」

そう言いながら自分が乗ってる、馬を見た。

「ワあ!。」

それを見た瞬間、たつきは大声を上げた。

「どうした。たつき。」

一護が瞬歩で飛んできた。

「ついにきたよ。」

たつきは自分の馬を見るような形で止まっていた。

「な、何がきたんだ?。」

一護は、なんか変だなと思いつつ、たつきに聞き返した。

「変化!。」

「ほんとか。良かったな。」

「えっ。たつき姉もきたの。変化。」

「ほんとたつきちゃん！どんな変化なの？」

「よくぞ聞いた。織姫！私の馬の此処、よ　　く見てごらん。」
「「「。」「」」

一護、夏梨、織姫はたつきが指差した馬のおなかあたりを見た。

なんか色が変わってるなあ。最初は黒だあた気がする。あつ、また変わった。

一護は見ながら思った。

「お　い。ルキア。馬の色が変わるのは何系だ。」

「色が変わるかあ。それは、鬼道系か？夜一殿はどう思いますか？。」

「

「うむ。」

「おい、ルキア。なんで夜一さんに聞いてんだよ。」

シユン

ルキアが瞬歩して、一護の隣に来た。

「貴様には、関係ないだろ。黙って聞いとけ。」

「「。」「」

一護は無視した。

「おーい。言ってもよいか？。」

夜一が、一護の肩の上で伸びていた。

「はい。」

「色が変わるのは、鬼道系じゃろうな。」

夜一は、ずばり、という感じに言った。

「そうですか。やはり鬼道系。」

「そうなのか。」

一護が会話に割り込んだ。

「なんだ一護。聞いておったのか。」

「聞きたくなくても聞いちゃうんですよ。夜一さん。」

「ああそーかいそーかい。」

夜一は受け流した。

一護は軽く無視した。

「で。たつきは、鬼道系ってことで間違いないんだな。」

「ああ。」

夜一の代わりに、ルキアが答えた。

「そうか。」

一護はそう言い、瞬歩でたつきのもとへ行った。

「おーい。たつき。」

「何、一護。」

「お前の能力分かったぞ。完璧に信用していいのかはわからないけどな。」

「で!。」

たつきの目は期待で輝いてる。

「お前は、やっぱり鬼道だよ。」

「やっぱり。」

「やっぱり、てことは、予想してたんだな。」

「うんまあね。」

「そうか。」

一護はそう言うってから、瞬歩でルキアのところへ移動した。

「ところで一護。」

瞬歩した瞬間に、ルキアが話しかけた。

「何故、あの時私の存在に気付いたのだ?」

ルキアが、悔しそうな眼をしていた。

「あの時って?。」

「一護はルキアが、言ってることが理解できなかった。」

「あの時だ、あ・の・と・き！私が、お前が住んでる家の後ろに隠れてた時だ！。なぜ、お前は私の存在に気付いたのかを聞いておるのだ！」

「。ああ。あれか」

「一護は、理解した。」

「そのことか。見えたんだよ、お前の姿が。」

「！。ほんとか。」

「ああ。」

「そうか、」

ルキアは、そっけなく答えた。

「一護の答えが意外だったようだ。」

「いーちごー。俺反応出ないよー。」

「反応じゃなくて、変化でしょ啓吾。」

ルキアとの話が終わった瞬間、啓吾と水色が話しかけてきた。

「僕は一応出たよ。変化。」

「オー！なんで、俺はいつも最後なのー！」

啓吾が嘆いてるのをよそに、一護は水色に聞いた。

「で、どんな変化だ？」

「なんか馬が、急に暖かくなってきたんだ。」

「それは、炎熱系だな。」

「ルキア！急に割り込んでくるなよ。」

「貴様はいつもやっておるだろう。」

「そう言いルキアはキッと一護を睨んだ。」

「はいはい。」

「ふーん僕は炎熱系か。ほかにも統系ってあるの？」

水色がルキアに聞いた。

ルキアは、頷きながら言った。

「ああ。お前が持つてる炎熱系のほかに、氷雪系、遊子が持つてる、流水系。夏梨、たつきが持つてる鬼道系。そして、一護が持つてる、斬月は直接攻撃系だ。ちなみに私の「袖白雪」は、氷雪系だ。」

「ふーん。」

水色は、あっさり返事をした。

「おい。いーちごー！」

突然後ろで声がした。振り返ったら啓吾がいた。

「なんだよ。啓吾。」

「俺変化でないんですけど！」

「へー。もしかしてお前、死神の才能ないかもな。」

「ガビーン！」

「そう、気を落とすな。啓吾。」

ルキアが声をかけた。

「ルキアちゃん！」

「馬に変化が出ないのは、一護と同じ、直接攻撃系か馬に変化が出ない、鬼道系か本当に才能がないのかのどれかだ。」

「えっなにそれ。」

「ほら着いたぞ！」

ルキアは啓吾を無視しながら、言った。

「ついたってどこに？。」

一護はルキアに聞いた。

みんなが瞬歩して、一護の隣に並んだ。

「わあ。」

「久しぶりだな。」

「ム。」

「誰がいるかな?。」

「…ここが。」

「ワオ。」

「へーえ。」

上から、一番最初に一護の隣についた、夏梨。そして、石田、チャド、井上、たつき、啓吾、水色の順だ。

「何言ってるのだ一護。」

「何って…。」

「下を見てみる。」

「えっ。あ…。」

一護は言葉を失った。

「ここは…。」

「瀟靈廷だ。」

瀟靈廷に到着！（後書き）

ついに、瀟靈廷につきました！

この話で、なぜ、一護はルキアの存在に気付いたのか、お分かりいたしましたか？

分かっていただければ幸いです。

あと、余談なんですがルキアが現れて、どこに行くのか一護が聞いたてルキアが答えたセリフと、上の最後のセリフが同じということに気付きました…。
まあいいです。

「A new adventure and bonds」の、番外編始めました！

「A new adventure and bonds」番外編という題名です。

良かったら、読んでみてください。

また、この番外編は皆様からのリクエスト話や、私が思いついたコメディ話、本編では触れられないルキアの昇進の日などを書いていく予定です。

何か、リクエストがありましたら、下の「一言」というところに書いてください。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいという、リクエストなどなど、お待ちしております。

一番隊隊舎（前書き）

特にありません。

7話目どうぞ！

一番隊隊舎

心は

誰かを大切に想うため

誰かを愛しく想うため

誰かを尊く想うため

誰かを護りたいと想うために

「やっと着いたか。」

夜一さんが、一番最初に口を開いた。

「なんすか。夜一さん。まるで何年かぶりに来たみたいな言い方して。」

「ほんとに何年かぶりに来たんじゃ。」

「時々来てたんじゃないんすか。瀟靈廷に。」

「来てないの。かれこれ3〜40年ぐらい。」

「そうなのか、ルキア。」

「ああ。」

ルキアは頷きながら言った。

「そうなのか。」

「それよりさあ。黒崎君。」

井上が目を輝かせて、聞いてきた。

「なんだよ井上。」

「『早く、瀨霊廷に行こうよ！お兄ちゃん、一兄。』」

「『』」

「ム。」

チャド以外のみんなが、俺に向かって叫んだ。

「分かった、分かったから、もうすぐ行くから。お前ら少しは落착けて。」

とか何とか言ってる本人が一番行きたそうなんだけどな…。

石田は一護を見て思った。

「おい、ルキア。早く瀟靈廷に行こうぜ!。」

「ああ。みんなついてこい。」

「どこに?。」

俺は聞いた。

「?丹坊^{じだんぼう}のところだ。」

「?丹坊か。元気してるかな、あいつ。」

俺は、そう言っ^て瞬歩で消えた。

みんな俺になら^って、瞬歩で消えた。

*

*

*

*

「よう久しぶりだな。?丹坊。」

俺は、?丹坊に会いそのままの勢いで話していた。

「お。久しぶりだな。一護。」

「ああ。ちょっとそこ通してくんないか?。」

「一護の頼みならいいぞ。」

そう言い、？丹坊は自分の後ろにある大きな扉を開けた。

「「「「わーお。「「「「」

夏梨、遊子。そして、啓吾、水色、たつきが感嘆の声を上げた。

「よく、見ろよ。ここが瀟霊廷だ。」

一護は、感嘆の声を上げた五人に向かい、言った。

「なんで、一護が言っておるのだ。そこは、私か夜一殿のセリフではないか！。」

「そんな固いこと気にするなって。ほら、もうみんな行っちゃったぞ。」

「おい。お前ら、勝手に行くな。」

ルキアが、先の5人を追いかけて行つた。

「ほれ。一護もはよ行かんか。置いてきぼりを食らうぞ。」

「はいはい。井上たちは？。」

「前じゃ。」

ほんとに置いてきぼりを食らうとは…。

俺は思つた。

*

*

*

*

「よつと。」

俺は、やっとルキアたちに追いついた。

「ちょい待てよ。ルキア。」

「なんだ。あとからくるお前が悪いのであろう!。」

こいつ、副隊長になってから切れやすくなったか?

怒っている、ルキアを見て俺は思った。

「こちらとて、あいつらを追いかけるのに大変なのだ。夏梨はいつの間にかいなくなるし。遊子は、夏

梨についていくし。啓吾はギャーギャーわめくし。まともなのは、水色とたつきだけか!。」

「いや、そんなこと、俺に言われても。」

「お前の妹たちが迷子になってるんだぞ!。」

「遊子たちは迷子になったのか?つか、もし迷子になったとしてその馬には探知機能とかついてないの

か?。」

「う…。それは、ついてたような気がする。」

「ついてんじゃないか。早くそれで探せよ。」

「誰を探すって、一兄。」

後ろで声がした。

俺は振り返った。

「なんだ夏梨いたのか。遊子は?。」

「ん。」

夏梨は後ろを指差した。

「なんだよルキア。遊子も夏梨もいるじゃないかよ。」

「ん…。まあいい。これで全員そろったか?。」

「ああ。た、ぶんな。」

俺はみんなを見渡しながら言った。

「それじゃ。護挺十三隊の一番隊隊舎に行くぞ。」

ルキアが言った。

「ねえ、一兄それって何?。」

夏梨が聞いてきた。

「ん。そうだなあ。死神の総本山といったところか。」

「ふーん。」

「じゃあ行くぞ。」

ルキアが言った。

シュン

ルキアは瞬歩でその場から消え、先ほどから見えていた大きな建物のところに立っていた。

あいつ、瞬歩できる距離が伸びたな。

俺は、ルキアを見ながら思った。

そしてみんな、その建物に瞬歩した。

*

*

*

*

「ここ、どこ?。」

たつきが聞いた。

「だから、これが一番隊舎。」

俺は答えた。

「それで私たち、この中に入るの?。」

「ああ。まあそんなところだ。」

「そんなところだ。じゃないだろうが。私たちはこれからここに入
って、総隊長殿に会い死神の学校に

通うのだろう。」

「えっ。ルキアも通うのか?」

「馬鹿か。私は通わない。副隊長の仕事があるからな。時々顔を見
せに行くぞ。」

「はいはい。」

「ねえ。一兄。あたしたちなんか見られてる気がするんだけど…」

「私も。」

「私も。」

「俺も。」

「僕も。」

上から、遊子、たつき、啓吾、水色の順。

「まあそうだろうな。俺たちここでは有名人だから。」

「えっそうなの?!。」

夏梨が驚いた声を上げた。

「まあな。あれ、言ってなかったか?。」

「うん。」

「じゃあ。「ストップ。そこまでだ一護。言っとくがお前らのことは死神の学校、真央しんあうれいじゅつじん霊術院に十分という程授業に出る。あいつらに教えるのはそれからでも遅くなくろ。」

「そうだな。じゃ、夏梨それまで我慢しとけ。」

「一兄たちどんなことしたの。あーもう。早く知りたい!。」

「あはは。まあいい。早く、総隊長に会いに行こうぜルキア。」

「そうだな。」

ルキアは、そう言い一番隊舎の扉を開けた。

一番隊隊舎（後書き）

フ。 やつと、やつと瀨靈廷の一番隊隊舎につきまし
たね。

なんか、長くありませんでした？

今回は、一護視点で書いてみました。
良くかけてましたか？

番外編のほうも、宜しくお願いします。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。
などなどお待ちしています。

一番隊にて（前書き）

総隊長登場です。

では、第8話でござい！

一番隊にて

私は 世界のすべてを愛し

彼は 世界のすべてを恨む

「おい、ルキア。まだか。」

「まだだ。」

「長くねえか。」

「ああ。長いな。」

「もう20分ぐらい歩いてるぞ。」

「あと10分くらい、歩くぞ。」

「えー。」

私の後ろで、誰かが叫んだ。

まあしょうがないだろう。最初に会った時から休みなしで動いているからな。

一護たちは大丈夫だろう。が、啓吾や遊子たちにはきついだろうな。

実際、あいつらだけ馬に乗ってるのに少しペースが遅い。

私は思った。

「おい。まだか。」

また一護か。

お前は疲れてないだろうに。

私は振り返った。

そしたら驚いた。一護は、遊子を背負っていた。

どうやら疲労で倒れたらしい。

そういえば、あの五人の中で遊子が一番霊圧が低かった。

なるほど。

私は理解した。

さっきから、一護がしつこく「まだか。」と聞いてくる訳を。

遊子を休ましてあげたいのだ。

あの馬は、乗ってるだけで霊力を消耗する。

一護はそれをわかって、遊子を馬から降ろしたのだろうか？

そんなことを考えてると、目的の部屋についた。

「一護、ついたぞ。」

私は、一番最初に一護に声をかけた。

早く遊子を休ましてあげたいだろう。

私なりの気遣いだ。

「お、わりいな。」

一護は、私が言いたいことを理解したようだ。

「ありがとう。」

こんなことで、お礼を言われる筋合いはない。

私はそう思った。

「総隊長。黒崎一護、またその同伴を連れてきました。」

私は、総隊長に報告した。

「うむ。馬はその柱につないどけ。ところで、」

私は、総隊長が仰ったように柱に馬を全部つないだ。

「はい。なんでしょうか。」

「その、黒崎一護の姿が見えないが。」

「あー。一護はたぶん、遊子を寝かしてるかと。」

「誰を寝かせてるって?。」

「一護の妹が倒れてしまったので布団に寝かせてるかと…。」

「そうか。まあ良い。早く、黒崎一護をここへ呼ぶように。」

「はい。」

私は、一護が遊子を寝かしている部屋の隅に行った。

「おい、一護。総隊長が呼んでいる。」

「ん。そうか。じゃあ、遊子のこと頼むわ。夏梨。」

「うん。」

一護は、私の呼びかけにすぐに応じた。

「じゃあ。行くか、ルキア。」

「ああ。」

*

*

*

*

「黒崎一護。久しぶりだな。」

「そうっすね。」

「妹は、良いのか?。」

「あー。まあみんなが、見てくれてますから。」

「そうか。」

「はい。それで、」

「うむ。これから一週間後。おぬしらを、死神の学校「真央霊術院」の、編入入学を許可する。それま

での、時間は自由に動いていいぞ。一週間後に一番隊隊舎に集合。お主も会いたい奴があるじゃろう。」

「はい。ありがとうございます。」

「失礼します。」

「うむ。」

*

*

*

*

「おい、夏梨。遊子は大丈夫か?。」

「アッ、一兄。うん。遊子は大丈夫。ところで話は?。」

「終わった。おい、皆。」

一護は、皆に向かって言った。

「学校への入学は、一週間後。それまでは自由行動だそうだ。けど、ここに来たことのない、遊子、夏

梨。啓吾、水色、たつきは、ここに来たことのある、井上、石田、チャドか俺と一緒に行動するよう

に。」

私は、驚いた。

一護の言い分が、意外と筋が通ってたからだ。

「分かった。」

代表として、たつきが答えた。

「じゃあ、皆自由行動な。俺、行きたいところあるんだ。」

「遊子と夏梨は俺と来い。啓吾たちは、好きなように。」

「じゃあ。」

シュン

一護は、遊子、夏梨と手をつないで瞬歩で消えた。

一番隊にて（後書き）

短い！

自分でも驚きました。

今回は、ルキア視点で書いてみました。

なんかルキア視点で書いてると、話が暗い気がします。

どう思いますか？

今日は、休みなのでどんどん更新しちゃいますよ！

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいという、リクエストなどなど、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8579x/>

A new adventure and bonds

2011年10月29日14時19分発行